人のご縁で
でっかく生きろ

㈲クロフネカンパニー代表
中村 文昭

今やっている仕事のことを目を輝かせて話している兄ちゃんを見て、涙が止まらなかった

◇15◇

高校3年のとき、アルバイトして貯めたお金で東京にいる兄貴のところに遊びに行ったことがあります。

「兄ちゃん、俺、渋谷とか原宿とか行ってみたいねん」と言ったら、「分かった。先生に頼んで、今日は早く帰るから部屋で待ってろ」と言って仕事に行きました。

ずっと兄貴の部屋で待っていたんですが、待てど暮らせど帰ってこない。帰ってきたのは夜中の3時でした。

「ごめんな。急な仕事が入ってきて、俺みたいなペーペーが弟が来たから早く帰してくれって言えんがな」と言って謝るんです。「明日は絶対早く帰ってくるから」と言って、両肩に抱えていたカメラの機材を下ろした途端、そのまま玄関先で寝てしまったんです。

次の日、朝の6時頃目を覚まして、「いかん、寝過ごした」と言ったかと思うと、寝る前に下ろした機材をまた両肩に抱えて「今日こそ早く帰ってくるから」と言って出て行ったんですよ。兄ちゃん、靴も脱がず、歯も磨かんと寝て、顔も洗わんと、歯も磨かんと出て行ったんです。

その日帰ってきたのは夜の11時頃でした。兄貴は「ごめんな」と謝りながら、「お前、腹減ってるやろ」と言うて、僕をラーメン屋に連れていきました。

□■■　■■□

ラーメン食いながら、兄貴は自分が今やっている仕事の話をするんです。

「俺な、今給料は3万8千円やけど、こんな仕事してるんや。それはこんなおもろいんや。それでな、この前はこんなことがあってな。それで将来はこんな仕事がしたいんや」って一生懸命話すんです。そのときの目がキラキラ、キラキラ輝いていました。

兄貴がやっている仕事は給料は安いし、休みはほとんどないし、朝スタジオに入ったら夜中まで、翌朝まで、そういうことはしょっちゅうで、怒られるし、だけど楽しくて仕方がないんだと一生懸命話している姿を見て、僕はラーメン食べながら涙がポロポロ流れてきたんです。

渋谷にも、原宿にも連れていってもらえんかったけど、兄貴が一生懸命、楽しそうに自分の好きな仕事をやっている話をする顔を見ただけで胸がいっぱいになったんです。

そして田舎に帰ったあと、進路指導の先生から「働くとはカネと将来性と世間体や」という話を聞いたわけです。

僕は先生に言いました。

「先生、それは絶対違う。うちの兄ちゃんは給料が3万8千円なのに、給料が安いなんて一言も言わないし、休みが週休二日の人を羨ましいなんてこれっぽっちも思ってない。それが本来の働くっていうことじゃないんですか。先生はもしかして教師をしながら、そんな思いになったことがないんじゃないんですか？」って。

そしたら、「それは理想や。現実はそうはいかんのや」って先生は言うてました。

そうやって僕は先生に反抗したまま、就職先も決まらないで卒業したのです。

（高鍋で開催された「大嶋啓介＆中村文昭講演会」にて～終）